

のこのようなプロジェクトについて、保険について相談いただいた場合には、民間の金融機関とプロジェクトの経済性とか環境、社会配慮の状況とか、そういったものも含めまして精密に審査をさせていただくということになっております。

以上でございます。

○又市征治君 両組織とも、今のところは決めていないと。ただ、一般論として、政府の方針を踏まえてというお話のようですけれども。

もう少し、先ほどからずっと大臣もおっしゃっています、基本的には、ODAなどというのは人間の安全保障という理念が基本に座ってなきやならぬということであって、そういう意味では、皆さんがもう少し自主的に物事を考えて判断することが必要じゃないか、こう思います。少なくとも、日本で現実に、この東京電力福島原発事故の原因究明さえもなされていない、大変な被害が起こっている、いまだに七年たってもまだ何万人という人たちが避難をさせられている、裁判が幾つも幾つも起こっている、こういう状況などということを考えてときに、そういう意味では、この原発の問題などというもの、あるいは、関連するインフラだからといってそれを推進するなどということがあってはならないし、先ほども申し上げましたけれども、もしこのイギリスの場合に、もし関わることによって公的資金が投入されるとか、

あるいは、そのことに万が一でも事故が起こった場合にそうしたことが起こってくるなどというところがあつてはもうならぬわけですから、もつと主体的に判断をし、この福島原発事故の同じ轍を踏まないように強く求めておきたいと思えます。時間が参りましたから、以上で終わりたいと思えます。

○蓮舫君 立憲民主党の蓮舫です。

お手元に資料をお配りをさせていただきました。ロイター電、ザ・ガーディアン紙、エコノミスト、AP通信、表紙だけ、タイトルだけなんですけれども、安倍総理夫人絡みの学校スキャンダル再び、公文書改ざん問題に焦点を当てたもの、そのことについて支持率急落に関しても日々英語で世界に発信をされています。

河野外務大臣、このことは御存じですか。

○国務大臣(河野太郎君) このロイター、ガーディアンといった報道は、今、エコノミストですか、配られたやつを今拝見しております。

○蓮舫君 今初めて。是非もつと敏感になつていただきたいと思うんですね。

一番最初のページに付けているロイター電ですけれども、タイトルに「son taku」、つまりもう和製英語が新たに生まれているんです。ソントクとは暗黙に指示に従うことと報じられ、そして二枚目なんですけれども、項目が作られて、

「WHAT IS SONTAKU?」、こんなことまで解説をされている。言葉の語源まで報じられているんです。つまり、日本の異質性、あるいは総理夫人がスキャンダルを呼び起こしたことで総理、内閣を直撃して支持率が下がっている、こうした報道が実は今日も後を絶たずに英語で世界に発信をされて、リアルタイムでネット等で読むことができる。

外務大臣、ある意味国益を損じていると思いませんか。

○国務大臣(河野太郎君) フォロ잉・アンスポークン・オーダーズというのは、恐らくどこの組織でもこれは国内外問わず起きることなんだろうというふうに思います。それ自体が悪いかといえば、それ自体が悪いわけではなくて、最近の一連の公文書の問題その他、説明がしつかりできていない、そこがやはり問題なんだろうというふうに思います。

○蓮舫君 説明がきちんとできていないから問題になつていいるんじゃないと思います。河野大臣、私もですけども、河野大臣も行革に大変力を注いで、お互い公文書担当大臣も務めています。担当大臣を務めると、やはり公文書その歴史の重み、そして国民の知る権利に應えるために努力をしようとしてきた先人たちの知恵、それをどのように守っていくかという責任、非常に大きいこと

を感じるんですが、今回は、説明し切れていないではなくて、国会答弁に合わせて公文書を改ざんをしてしまったという重大な、重大な問題なんです。このことについてももう少し何かお考えはありますか。

○国務大臣（河野太郎君） おっしゃるとおり、公文書の管理担当大臣を務めさせていただきました。そんな中で、公文書館に度々足を運び、また外務省には外交史料館というのもございます。本当に、おっしゃったように、先輩方が、先輩方と言うとちょっと軽いかもしれませんが、先人が文書をしつかり取って保存をしてくださったということにある面感動する部分すらございます。

そんな中で、例えば、日本とデンマークが国交樹立百五十周年を祝ったんですが、そのときの条約が日本側は失われてしまっていて、それをデンマークからお借りをして、日本の技術で複製を作らせていただいたということもございます。そういう経緯をすると、一度失われてしまったものはまあこれはたまたまチャンスがあって、複製ではありませんが戻せたわけでありますが、やはりこの公文書というものをしっかりと管理していくというのは極めて大事でございますし、特に外交ではこの文書を管理することが様々な交渉事にもつながってくるということを考えると、この文書の

管理というのは極めて大切だというふうに思います。

そういう中で、公文書が、御指摘をいただきましたように、書き換えられるということは断じてあつてはならないということでございまして、そこについてはそうしたことが二度と起きないようにしっかりと襟を正さなければならぬというふうに思います。

○蓮舫君 巧みに事の本質が外務省だけの問題になってるのが非常に残念なんです。私、外務省はやっぱり大変な努力をされてきた省庁だと思つています。

平成二十二年の六月これは四日、外務省は一つの調査報告書を公表しました。外交文書の欠落問題に関する調査、これ当時の外務大臣は岡田克也さんだったんですが、核の持込みであるとか、朝鮮半島有事の際の戦闘作戦行動、これ日米関係、日米の間におけるの密約、四つの密約について調査をしろと命じました。これに対して、外務省は調査チームを結成して、外務省本省及び在米大使館など約四千四百冊ものファイル、これを徹底的に洗い出したんですね。その結果、これまでは日本政府は公式にないとしていた核持込み密約の根拠を成す文書が実は保管ファイルにあったということも判明をしました。

他方で、本来あるべきはずの重要文書が欠落、

写ししかなくて原義がない重要な事実も浮き彫りになって、調査をした報告書がこの六月の四日に発表されました。

そのまとめで書いてある文章の重みは私は非常に大きいと思うんですが、外交文書を失うことは歴史を失うことであると。明らかに言わなくてもいっばいあるんですよ。今までないと言われていたものがあつた。誰がそれを保管していたのも分からないとか、あるいは、前の外務官僚の方が持っていたというものを引き継いでいないとか、幾つもの疑惑がまだ明らかになっていませんが、ちゃんと調査をすれば、ないとされたもの、改ざんされたものを正すことはできると思うんです。この外務省の努力についてのようにお考えですか。

○国務大臣（河野太郎君） 当時、そういう調査が岡田外務大臣の下で行われ、今御指摘をいただいたようなしつかりとした調査ができたというのは、非常に良かったんだと思います。

おっしゃるように、文書がなくなるということは、その部分の外交が欠落をする、特に外交文書は機密文書であることが多いわけですから、それが公開される前になくなってしまふということは、一体全体どういう外交が行われたかが分からなくなってしまうということにつながるわけですから、外務省としてやはりこの機密文書を含めた文書管

理というのは極めて大切でありますので、外務大臣としてしっかりと外務省を指揮してまいりたいと思います。

○蓮舫君 そうすると、まあ外務大臣の指導力というののもとても大切だと思うんですけども、そうした歴史を成し得る公文書を有する、その最終責任者は大臣ということでしょうか。

○国務大臣（河野太郎君） 恐らく、外務省の場合には外務大臣が指揮をしておりますから、文書の管理を含め、外交の責任者は外務大臣ということになるかと思えます。

○蓮舫君 財務省においてはどうかと思えますか。  
○国務大臣（河野太郎君） 今、公文書のこの改ざんの問題で財務大臣の下徹底的な調査が行われておりますから、財務省の調査の結果を見守りたいと思えます。

○蓮舫君 是非、行革にこれまで力を注いできた河野大臣ですから、期待も申し上げて、以前予算委員会のときには、安倍総理、安倍内閣に染まらないでほしいとエールを送ったことを今思い出したんですが、是非、財務省の省内の調査結果がこの外務省がこれまで出した調査報告書のように精度が高いものでない場合、内閣の一員として、やはりそこは厳しく厳しく閣内で発言をしていたいただきたいと期待をしますが、いかがでしょうか。

○国務大臣（河野太郎君） 財務大臣の指導の下、

しっかりとした調査が行われていると認識しております。

○蓮舫君 終わります。ありがとうございます。  
○アントニオ猪木君 元氣ですか。春が、そして桜が早く咲きますように、いつもより声を大きく張り上げたら、冬が何を勘違いしたのか雪までしょって戻ってきてしまったという。まあ、暖かくなってきたので良かったんですが。

ちょうど、おととも質問しましたが、ちよつと、皇太子様がブラジルに行かれました、多分今日ですか、もう帰ってこられているんですかね。

日系の関係を大変私は重要視し、また日系ブラジル人のやっぱり出稼ぎとかいろいろありましたので、これから大きくブラジルが成長してもらいたい、そんな思いも含めまして質問に入りたいと思えます。

二十九年年度予算と比較し、三十年度は大幅に予算が計上されています。日系社会の継続的な発展に向け、ビジネスや次世代育成など広い分野で中南米社会との連携強化をとありますが、何を具体的に強化するのか、その点についてお聞かせください。

○政府参考人（中前隆博君） お答えを申し上げます。

中南米には世界最大の日系社会が存在しております。この日系社会は、現地社会の尊敬と信頼を

集め、各国の親日感情の基礎となっており、日本との懸け橋として日本と中南米の関係強化に大きく貢献しております。

一方で、世代交代の進展等に伴いまして、日系社会や日系人の意識にも変化が現れつつある、そういう中で、時代の新しい要請に即した形で日系社会との連携を強化する必要があると考えてございます。この点につきましては、昨年、中南米日系社会との連携に関する有識者懇談会が外務大臣の下に設置され、五月にその旨の報告をいただいたところでございます。

これを踏まえまして、平成三十年年度予算案におきましては、次世代の日系社会、日系指導者等の招聘、現地日系ネットワーク形成の支援、日系社会の実相調査あるいは在外公館の文化事業などの取組を強化して、現地日系社会が引き続き発展していくことを応援し、もって日系社会との連携を一層強めてまいりたいと、かように考えてございます。

○アントニオ猪木君 二〇一八年、ブラジルにおいて、テメル大統領の任期満了に伴う大統領選挙が行われようとしています。また、今日の朝では、前の前の大統領ですね、非常に政治的に混乱して、我々日本から見るとこんなのでいいのかなど。必ず出てくる、大統領が汚職で捕まるのか、また裁判になるかという。そんな中で、選挙結果を踏ま